

歴史

「とよの」の歴史

旧東能勢村の開拓は、天養年間（1144年）鳥羽天皇の頃に、貝川三位長乗一族朗党36人が木代の庄（現在の木代・切畑）に移り住んでから始まるといわれています。その後幾多の変遷を経て明治4年（1871）廃藩置県の令により、高槻藩より脱し、兵庫県に編入豊崎郡に属し、同5年現在の大阪府の管轄となり、余野村・川尻村・木代村・切畑村・野間口村となりました。旧吉川村の統治は、源満仲及びその一族が所領し慶長年間以後は能勢氏あるいは高槻藩の支配下にあり、またその間徳川幕府の天領にもなりました。明治に入り兵庫県川辺郡の統治より離れ大阪府の管轄になり明治22年市町村制の施行にあたり前記5ヵ村が合併し東能勢村と称し、吉川は吉川村となりました。昭和28年町村合併推進法の制定により、東能勢村は同30年4月に隣接の茨木市高山地区を編入、翌年9月吉川村と合併、さらに同33年4月には京都府亀岡市の牧、寺田地区を編入しました。昭和52年4月に新生「豊能町」として発足し現在に至っています。



豊能町の石造仏と社寺

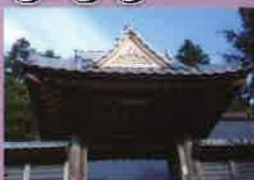
高山地区



高山のマリアの墓

墓碑は四基から成り、一基が離れている。江戸時代中期の元文・延享・寛延の年号が刻まれる。二組の夫婦の墓と伝えられている（綜合清溪村史より）。ルイス・フロイスの「日本史」によると、高山飛騨守（右近の父）の教名はダリオ、母はマリアであった。右近の祖母ジョアンは、晩年高山の小聖堂（ジャン）で過ごしたという。

牧・寺田地区



梅相院

明智光秀の山崎の合戦時、その一方の手先を任せられ天王山にて戦死した元笑路城（松尾城）城主、長沢山城守（長沢一族）の、菩提寺として建立された。江戸初期、当地領主であった旗本前田安芸守（豊臣五奉行の一人、前田玄以の子孫）の時、長福寺を梅相院と改め現在に至る。



寺田役の行者

修験道の祖とされる役の小角は、奈良時代に大和国（奈良県）葛城山に住んで、仏教を修行し、吉野の金峰山、大峰などを開いた。中世以後修験道の霊山が各地に広がり、崇拜するようになった。近世には各地に行者講がつくれ、寺田の役の行者像は講によって祀られたものである。

吉川地区



吉川高代寺五輪塔

境内本堂より横路に至るところに五輪塔数基が並び、向かって一番右側の五輪塔は、源仲頼の塔と伝えられている。南北朝時代（1354）の造立。



吉川高代寺参道六地藏

高代寺旧参道の中程、六町石と七町石の間に、白く風化した台形の石があり、像高33cmの六地藏が彫られている。六地藏はそれぞれ持ち物が違っており、六道能化の姿を表している。慶安二年六月二四日（1649）。

余野・野間口・切畑地区



切畑下所多尊磨崖仏

旧長安寺跡の磨崖仏とも言われ、石英閃緑岩の自然石に円頂合掌の坐像22体と1体の阿弥陀立像及び1基の五輪塔が半肉彫りされている。阿弥陀像の下の枠内に「為逆修檀」天正二年十一月吉日の銘文、その向って右側に4体の坐像、向って左側に五輪塔、その地輪部にも「天正二年 為逆修五月十五日」とよめる銘文がある。

に大きく蓮華座を刻み、上に高さ83cmの舟形を彫りくぼめ、像高70cmの地藏立像です。鎌倉後期、像の左右の光背内に次の銘文があります。向って右側、正和三年甲卯月（1314）、左側に十五日願主平末弘。



大円釈迦堂阿弥陀三尊笠塔婆

乾元二年（1303）鎌倉後期に造立。阿弥陀三尊を彫る。中尊の阿弥陀如来は坐像で定印を結び、左右の脇侍は観音菩薩・勢至菩薩の立像、中尊の肉髻は高く像容は鎌倉後期の特徴を示している。

阿弥陀如来の下、両脇侍の間に「為三世四恩乾元二年（癸）卯二月下旬願主 敬白」。



切畑法性寺地藏石仏

法性寺の墓地の入口にあります。高さ133cm、最大幅79cmの自然石の表

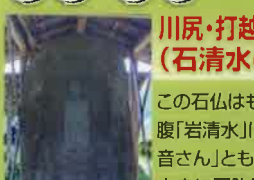
に大きく蓮華座を刻み、上に高さ83cmの舟形を彫りくぼめ、像高70cmの地藏立像です。鎌倉後期、像の左右の光背内に次の銘文があります。向って右側、正和三年甲卯月（1314）、左側に十五日願主平末弘。



余野十三仏

この地方はキリシタン信仰が一時威勢をふるっていた頃、自然石（石英閃緑岩）の表裏に各20体の仏像が彫られています。この地には遊仙寺の前身の寺があり、小字名を「十三仏」といったところから、「余野十三仏」と呼ぶようになった。永禄7年（1564）の二月、道清が本願の銘文がある。

木代・川尻地区



川尻・打越阿弥陀三尊石仏（石清水の観音さん）

この石仏はもと裏山の天台山の中腹「岩清水」にあった。「鱒見ずの観音さん」とも呼ばれる伝説が残る。中央に阿弥陀立像が彫られ、向って右に観音菩薩、左は勢至菩薩立像となっている。南北朝期の正平七年（1352）年に僧良円が願主となって造立。南北朝期能勢は足利方であったため、殆んど北朝の年号となっているが、南朝の年号「正平」を使用している。

に阿弥陀像、天正2年（1574）銘、安土桃山時代の作。上段右端の地藏像の一体に「妙海」と法名が刻印されている。いずれも逆修仏として自分の後世安楽を願っての結案造立と思われる。



木代ためきやぶ多尊磨崖仏

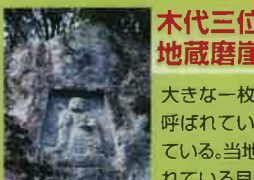
旧池田街道沿いの竹やぶの中にある。自然石に二段にわたって16体の石仏が彫られ、中央

に阿弥陀像、天正2年（1574）銘、安土桃山時代の作。上段右端の地藏像の一体に「妙海」と法名が刻印されている。いずれも逆修仏として自分の後世安楽を願っての結案造立と思われる。



川尻中の谷多尊石仏

自然石に阿弥陀三尊立像が上段に、下部三段に地藏坐像が計16体彫られている。主尊の阿弥陀立像は来迎印を結び、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩を配置、斜めに彫られている。16体の地藏は造立願主それぞれの逆修仏とおもわれます。天正元年（1573）に造立。



木代三位塚の地藏磨崖仏

大きな一枚岩に「サンミさん」と呼ばれている地藏菩薩が彫られている。当地方の開発の祖といわれている貝川三位長乗の徳をたたえた称号で、後世の人が貝川三位の徳を顕彰して造建したという。梵字「カ」（地藏種子）、「タラク」/「バン」が刻まれている。



切畑法性寺石風呂

この石風呂は、昭和49年3月、木代福田の頂応慶寺跡の石風呂とともに大阪府文化財に指定されています。使用目的は僧侶が齋戒のために使用した。又厄病除災に入浴説等あり。鎌倉時代と推定。

垂れて与願印を、左手を胸前に挙げて宝珠を持つ。最も早く表れた古式像である。願主が夫婦で比翼連理の考えによるもとおもわれます。



野間口双体地藏石仏

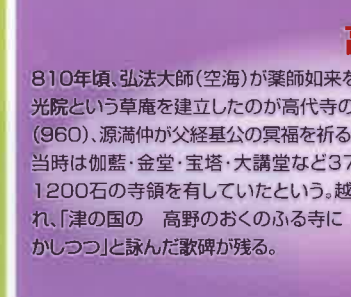
砂岩質の頭部山形の板碑で、方形の龕の中に地立像二体を刻出する。この地藏は右手を

垂れて与願印を、左手を胸前に挙げて宝珠を持つ。最も早く表れた古式像である。願主が夫婦で比翼連理の考えによるもとおもわれます。



走落神社の由緒

走落神社は寛平元年（889）藤原氏が創立したといわれている。延喜式神名帳に載る式内社である。室町・安土桃山時代戦国動乱時、織田信澄の乱入、兵火を恐れ大永年間（1521～28）同社の天照大神を木代の小玉神社に少彦命名を切畑の稻荷神社に移した。この時、走落神社の社名も藤の森神社に改めた。明治の神社合併で9つの神社が合併する。この時、神社の名前を合併神社の中でも最も由緒のある式内社の「走落神社」とした。



高代寺略縁起

810年頃、弘法大師（空海）が薬師如来を本尊とする吉河山瑠璃光院という草庵を建立したのが高代寺の始まりである。天徳4年（960）、源満仲が父経基公の冥福を祈るために創建した。当時は伽藍・金堂・宝塔・大講堂など37の大伽藍、12の支院、1200石の寺領を有していたという。越後の国の良寛さんが訪れ、「津の国の高野のおくのおふる寺に 杉のしすくを 聞きあかしつ」と詠んだ歌碑が残る。



西方寺と高山飛騨守と高山右近

西方寺はキリシタン大名高山右近と深い関係がある。高山飛騨守は永禄6年（1563）に大和の国沢城にて洗礼を受けダリオと称した。そのころダリオの母は高山に住む。永禄7年、ヴェレラ神父やロレンソを伴い、摂津能勢高山の地を訪れ母にも洗礼を受けさせている。母の霊名をジョアンといった。またヴェレラ神父により小聖堂（オラトリオ）を「聖ジャン」と名づけられ、多くのキリシタンが祈りを捧げた場でもあります。右近は12歳で洗礼を受け、ジュストといった。